

3 芸南の先人たち

特に『迨孫疫痢考』をめぐる

江川 義雄

文政五年（一八二二）当地方に始めて大流行をもたらしたコレラ禍を中心に考察した。村医・原田玄庵自らが診療し、見聞し更に安芸藩からの要請により藩医達の意見書が出され、それらの知見集を収録して一書となし、『迨孫疫痢考』を編し、頒布した。本書に治療指針をのべた医人達は当時の医療レベルを代表した高名の藩医達である。それらの知見はその時代の医療思想がうかがえて興味深く同書に出てくる医人達についてふれることにする。

編者・原田玄庵の名は雄煥、雲蝠と号し芸南諸島の中の蒲刈島三之瀬の人であるが、その伝については不詳である。『三毒備考』『虫獸咬傷備急方』などの著書があるといわれる。

コレラ流行地の一つとなった蒲刈島は沿岸部より隔離され交通不便の所といっても、当地の瀬戸内文化圏の観点からすれば、海上交通の要路に位置し、藩政時代は御手洗港に次ぐ港とし、海駅が設けられ、朝鮮通信使や西国大名の宿泊地で、江戸・大阪への中継地であり、番所が所在した。それだけに陸地部よりは内外の交易・政治・文化面については交流があり、伝染病侵入にとっても同様である。この小さい島に当時人口は六千余名、医者八名と記録され、安芸郡下でも屈指の賑わいがあったことがうかがえる。玄庵の記述するところによると、コレラは文政五年対馬におこり長門に渡り、芸州に至り浪花に及び、多くの死者を出したとある。芸南・西条の野坂完山『鶴亭日記』によれば、虎狼痢と申す疾城下に流行し、諸郡中に拡がり、一村に病者百人或は三百人、一家に三人ないし五人あり：その対策として四味平胃散、加葛花枳実を服用すれば予防できるとし、近隣二十二村に薬剤一五五五二点を無料施薬したとし、同日記は同年九月二十一日の項ではコレラは御手洗港に流行し、翌年二月頃まで、関連記事がみえる。

コレラの伝染経路は、下関・萩流行記によれば、医師も名付け難き大熱病、世にコロリ病といい、対馬より伝染し、八月十日頃より二十五日迄の死者五八三名その猛烈急劇な伝染病は薬石の治するところのものでなく、病原は悪厲の気によると解している。また朝鮮疫病史によれば、一八二一（文政四年）七月下旬頃コレラが半島で始めて大流行し、死者数十万を出し、医薬救うに術なしと嘆かし、コレラは越冬、四月に再流行をみ、これが八月濟州島・対馬に伝わり同月下旬山陽道、京畿、東海道に侵入したことになる。

原田玄庵は門弟の管洞庵を下関に派遣し、コレラの実際を学ばせている。

更に芸藩々医の本病に対する知見、治療、対策を収録している、その口述や意見書の執筆者達について次に述べ、時代背景を考察したい。

恵美三圭は流行病医案をのせている。初代恵美三白の末子で、玄笥・貞秀である。

中村元亮は天下下痢病考をのせている。玄庵が親しく指導をうけた高名な蘭医である、安浦出身で中村太室の

嗣子で、檜林峽山に師事。

山中一庵 小児処方例を示す。一四〇石の俸祿。

高橋文良は症例治療を述べる。八世西道朴（甫安）の弟。オランダ外科の御側医師。

御園道英は天行病之愚考をのせた儒医にして御側医師並。

小川敬元は天行病治案をよせ、六代目の藩医で逢山と称した。

牛尾玄珠は天行吐利考をよせ、代々医家で畏翁と称し、巖山先生と呼ばれる。

中井厚沢はフーヘランドの文献よりの処方を用いる。

星野良悦は天行疫癘考一篇をよせている。以上九名の他に、蒲刈島居住医師は次のようであるが、いずれもその後を詳かにする事は出来なかつた。下島浦・管洞庵、三之瀬・永浜恭順、向浦・木村岷龍、田戸浦・鎌田良達である。

（日本医史学会広島支部）